

芥川龍之介「忠義」論：近代的人間の模索

Sekiguchi, Yasuyoshi / 関口, 安義

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

74

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

2006-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010139>

芥川龍之介「忠義」論

— 近代的人間の模索

はじめに

芥川龍之介の小説「忠義」は、封建制度下の人間の生き方を描く。わたしは前からこの小説は、芥川前期の佳作であると評してきた。⁽¹⁾ 緊張した場面が読者をとらえ、しかも、人間の生き方を考えさせる点が評価できるのである。芥川が「忠義」の観念をヒューマニズムに反するものと見たことは、明確なことなのである。わたしは「忠義」は「羅生門」「鼻」「偷盗」などと同様、初期芥川の自己解放の叫びが託された小説だと考えている。「忠義」を抜きには、初期芥川文学は語れない時代が訪れているのである。

折しもペンギン・クラシックス・シリーズに入った新訳による芥川アンソロジー『羅生門』ほか17編⁽²⁾には、はじめて「忠義」が英訳され、英語圏の読者にも本作は読まれるようになった

関 口 安 義

た。翻訳に当たったジェイ・ルービンは、「忠義」を心理劇と言いい、「十年後に書かれる自伝的作風の「幽車」⁽³⁾とのあいだには、驚くべき類似が見られる。このことからわかるのは、歴史的な素材を生かすため細心の注意を払っているときでさえいかに芥川が現代的な作家であったか、ということだ⁽⁴⁾」という指摘をしている。まさにその通りなのだ。芥川は歴史に衣装を借りて、近代に生きる人間の苦悩を描き出し、さまざまな制度の束縛の中で、いかに生きるべきかに思いを馳せているのである。

一 草稿「主従」と典拠

「忠義」は一九一七（大正六）年三月号の雑誌『黒潮』⁽⁵⁾（第二卷第三号）に発表された小説である。前年二月創刊の第四次「新思潮」に寄せた「鼻」が漱石の目にとまり、激賞されたことがきっかけとなり、芥川は横須賀の海軍機関学校の英語教師とい

う常勤の仕事をこなしながらも、着実に作品をものしていた。「芋粥」(『新小説』一九一六・九)、「手巾」(『中央公論』一九一六・一〇)に続き、一九一七年の新年号には、『新潮』に「尾形了齋覚え書」のような佳作も発表していた。

「忠義」の載った太陽通信社刊行の『黒潮』は、前年の十一月に創刊されており、編集部には後年第一書房を創業し、すぐれた詩集や不遇な作家の書物を刊行した若き長谷川巳之吉がいて、創刊以来文芸欄を担当していた。長谷川は芥川の一高以来の友人松岡譲の郷里新潟の後輩で、一九一四(大正三)年上京以後松岡に兄事し、松岡の下宿では芥川とも顔を合わせていた。わたしが生前の長谷川巳之吉から直接聞き書きしたところでは、社員十名ほどの『黒潮』編集部では、長谷川が文芸に精通しているというので、文芸欄担当を任されたという。「忠義」は長谷川巳之吉の依頼で書かれた。芥川は公務に縛られながらも、典拠をもとに、ここに一編の小説「忠義」を生み出す。ついにながら、長谷川はこの頃、佐藤春夫を生田長江から紹介され、「田園の憂鬱」の第一稿の前半にあたる「病める薔薇」を載せる労をとっている。芥川の「忠義」発表三か月後のことである。「忠義」は、下書き段階では「主従」のタイトルが与えられていた。つまり江戸中期延享四年八月十五日に、江戸城内において板倉修理が熊本城主細川越中守宗孝を斬った事件に取材し、「家」をめぐる主(殿)と従者(家老)の問題に光を当てた小説である。草稿「主従」は、芥川資料岩森亀一コレクションを経て、山梨県立文学館が所蔵している。現全集に活字化された草稿を見ると「主従」は定稿の前半部のみであり、枚数も「忠

義」の四百字詰原稿用紙四十枚に対し、「主従」はわずか九枚である。「忠義」前半のあらずじのような草稿が残っていたことになる。

定稿「忠義」は、「一 前島林右衛門」「二 田中宇左衛門」「三 刃傷」の三章からなっているが、草稿は「一 前島林右衛門」「二 板倉修理」の項目が立てられるのみで、田中宇左衛門に関する記述はない。要するに現存する「主従」は、「忠義」前半のあらずじにしかすぎないのである。なお、角田忠蔵編『芥川龍之介自筆未定稿図譜』(大門出版美術出版部、一九七一・九)には、「刃傷」と題された未定稿の複製が載っていることからして、草稿は割れて、それぞれに所蔵されていることになる。そうした草稿の問題は、しばらく措くとして、芥川は以下に述べる典拠に依りながらも、当時の社会や自己の抱え込んでいた生存の問題を、作品に転位させるのであった。

「忠義」の典拠は、早く芥川研究の先達吉田精一⁵⁾によって、松崎堯臣の『窓のすさみ』『営中記』、それに『営中刃傷記』『藩翰譜続篇』などが挙げられていた。が、近年須田千里⁶⁾によって、本作は「一部『窓のすさみ』を踏まえながら、主として『近代公実厳秘録』に拠る」という実証に照らした着実な論が書かれ、典拠考はまずは動かし難いところだ。須田は「忠義」と「厳秘録」とを比較し、「筋立て・内容はいわずもがな、文章・字句・比喩のレベルに至る迄、よく似ていることがわかる」とし、例を挙げて論証する。なお、「窓のすさみ」の援用があることも須田は指摘する。

草稿のタイトル「主従」が、「忠義」に代わったことに関し

ては、菊地弘に「主従」ではタテの秩序が絶対不動のものとなってくるから個の自由な発想や意志は不可能となり、自然と小説の構想は決まり、虚構の美学は成り立ちにくい。(略) 芥川が『主従』を『忠義』と変えたことは、テーマの上から見ても重要な意味をもったわけである」という見解がすでにある。確かに「忠義」の概念は、「主従」よりずっと広い。「主従」は主人と家来、主君と従者の二人の関係であるが、「忠義」となると、主君ばかりか藩やひいては国家が意識されるからである。芥川の「忠義」は、封建制の倫理的規範である、主(殿)に対する従(臣下)の服従というものに、疑いの眼を向け、さらには封建制度そのものに批判を及ぼすことになる。

二 神経衰弱

小説「忠義」は、次のような書き出しではじまる。

板倉修理は、病後の疲労が稍恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲はれた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさへ、身がはいらない。廊下を通る人の足音とか、家中の者の話声とかが聞えただけで、すぐ注意が擾されてしまふ。それがだんだん嵩じて来ると、今度は極些細な刺戟からも、絶えず神経を虐まれるやうな姿になった。

第一、黄盆の蒔絵などが、黒字に金の唐草を這はせてみると、その細い蔓や葉が、どうも気になって仕方がない。

その外象牙の箸とか、青銅の火箸とか云ふ先の尖つた物を見ても、やはり不安になって来る。しまひには、畳の縁の交叉した角や、天井の四隅までが、丁度刃物を見つめてゐる時のやうな、切ない神経の緊張を、感じさせるやうになった。

板倉修理という徳川大名の病める神経は、芥川龍之介という大正期知識人の、これまた病める神経に重なる。芥川は神経衰弱で悩む自身の姿を、板倉修理に重ねているのである。修理は毎日陰鬱な顔をして、居間に居すくまっている。「出来る事なら、この儘存在の意識もなくしてしまひたいと思ふ事が、度々ある」というのは、二年ほど前に生じた失恋事件後の、さらには晩年の芥川自身の心境にも通じる。早くも芥川は己の宿命を見抜いていたかのである。

回りの者は、彼の心もちには何の理解もない、ただ平穩のみ願う譜代の臣ばかりである。「己は苦しんでゐる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない」という周囲の無理解は、彼の神経衰弱を亢進させる。彼は事あるたびに興奮した。わめきたててゐることは無論のこと、「刀架の刀に手のかかつたことも、度々ある」と語り手はいう。彼が逆上した時は、「必ず左右の鬚の毛を、ふるへる両手で、かきむしり始める」のである。そういう時には、「誰も彼の側へ近づかない。ここには孤立した人間がいる。相互理解を欠き、常に誤解や中傷を生みがちの人間生活の孤独は、芥川が終生その作品のテーマとしてきたところでもある。

封建制は下積みの民衆ばかりか、彼らを支配する君主をも苦しめるとは、この一年半後芥川と同僚菊池寛が「忠直卿行状記」〔中央公論〕一九一八・九で描くことになるが、芥川は菊池に先んじて封建制下の君主の苦しみを描いているのである。

芥川は神経衰弱からくる「発狂」の怖れを必要以上に書き込む。「発狂——かう云ふ怖れは、修理自身にもあつた。周囲が、それを感じてゐたのは云ふまでもない。修理は勿論、この周囲の持つてゐる怖れには反感を抱いてゐる。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしやうがない」。芥川は主人公板倉修理に託して己の苦悩を語っているかのである。

このことは、冒頭に記したように、英語の新訳で芥川アンソロジー編んだジェイ・ルービンが、「忠義」と「十年後に書かれる自伝的作風の「齒車」とのあいだには、驚くべき類似が見られる」と喝破したことにもつながる。

修理の怖れと不安、発狂への本能的恐怖と周囲の人たちへの反発は、前島林右衛門という人物を登場させることで、より明らかとなるのであった。

ここに板倉修理という封建領主に対立的存在として登場するのは、「家老」といつても、実は本家の板倉式部から、附人として来てゐる」前島林右衛門である。彼は「病苦と云ふものの経験のない、赧ら顔の大男で、文武の両道に秀でてゐる点では、家中の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない」とされる。彼はこれまで、始終修理に対して「意見番の役を勤めていた。

三 二人の家老

芥川はここに封建君主に対立する人物として、前島林右衛門を配置した。それ故、林右衛門には、近代人の思考と行為が付与されるのであった。もつとも、林右衛門として当初は封建社会の倫理に生き、忠義の道を歩もうと努力している人間として描かれる。林右衛門を縛る封建遺制は、当初彼を苦しめる。「林右衛門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以来、夜の日も寝ない位、主家の為に、心を煩はした」とある。修理はしばらく病の床にあつたので、快気祝いに江戸城に参上しなければならぬ。ところが修理の逆上は、登城の際に旗本仲間その他にどんな無礼を働くか知れたものではないと考えると、林右衛門は居ても立つてもいられない。万一刃傷沙汰にでも及べば、板倉家七千石は「お取りつぶし」である。

そこで林右衛門は、主君を諫める。テキストには「機会さへあれば修理に苦諫を進めた」とある。けれども、修理の逆上はやまない。「寧、諫めれば諫める程、焦れば焦れる程」逆上は進む。林右衛門には、耐え難い苦しみの日々が続く。

修理は林右衛門の諫言に対し、「主を主とも思はぬ奴ぢや。本家の手前さへなくば、切つてすてようものを」として、危うく林右衛門を手討ちにさえしようとした。林右衛門は修理の眼の中に、「怒りばかりではない」、「消し難い憎しみの色」を読む。けれども林右衛門には、実直さと誠実さがあり、とにかく主君の板倉修理に忠義を尽くそうと努力する。テキストに見よ

う。

少くとも、最後の一刻を除いて、修理に対する彼の忠心
は、終始変らないものと信じてゐた。「君君為らざれば、
臣臣為たらず」——これは、孟子の「道」だつたばかりで
はない。その後には、人間の自然の「道」がある。しかし、
林右衛門は、それを認めようとしなかつた。……

林右衛門はこの封建城主に、反感をいざくことを避けていた。
そして時代のモラルとしての《忠義》に立つことを絶対とした。
己を縛る律法としての《忠義》感覚は、彼にとつて絶対だつた。
が、《忠義》を絶対とするには、彼のような「文武の両道に秀
でてゐる」賢い男には、最終的には無理があつた。彼は「飽く
までも、臣節を尽さうとした」が、苦諫の意味のないことを悟つ
た時、「修理を押込め隠居にして、板倉一族の中から養子をむ
かへよう」とする手段を講じる。林右衛門は「何よりも先、「
家」である」と考える。そして「当主は「家」の前に、犠牲に
しなければならぬ」とした。彼は本家の板倉家の子息の一人
を跡目にして養子縁組をし、主家を守ろうとした。「彼は、こ
こまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たやうな心
もちがした」という。

けれども、この計画はもうくもつ見える。林右衛門の計画は、
内室を通してめれる。修理は「毗を裂いて憤」る。修理の憤
りは、語り手によって、修理の立場から以下のように語られる。

成程、林右衛門は、板倉家を大事と思ふのかも知れない。
が、忠義と云ふものは現在仕へてゐる主人を蔑にしてま
でも「家」の為を計るものであらうか。しかも、林右衛門
の「家」を憂へるのは、杞憂と云へば杞憂である。彼はそ
の杞憂の為に、自分を押込め隠居にしようとした。或は
その物々しい忠義呼ばりの後に、あはよくば、家を横領し
ようとする野心でもあるのかも知れない。——さう思ふと
修理は、どんな酷刑でも、この不臣の行を罰するには、軽
すぎるやうに思はれた。

両手で鬢の毛をかきむしり、「林右衛門を縛り首にせい」、「縛
り首にぢや」と修理が命じたことは、すぐ近習から林右衛門に
伝わる。

ここから林右衛門の変身が始まるのである。「よいわ。この
上は、林右衛門も意地づくぢあ。手を拱いて、縛り首もうたれ
まい」には、殿である修理への反逆ばかりか、《忠義》という
封建倫理からの解放の叫びが読み取れる。彼にまとわりついて
いた、それまでの「得体の知れない不安」は、この沙汰を聞いて
「跡方なく消え」、心が明るくなるのであつた。「今の彼の心
にあるものは、修理に対するあからさまな憎しみである。もう
修理は、彼にとつて、主人ではない。その修理を憎むのに、何
の憚る所があらう」として、そのエネルギーをバネに、林右衛
門は家を出る。

前島林右衛門が立ち退いた後に板倉家の家老となるのは、田
中宇左衛門であつた。彼は修理の乳人をしていたこともあり、

「修理を見る眼が、自らの家来とはちがつてゐる。彼は親のやうな心もちで、修理の逆上をいたわつた」とある。ここに林右衛門の近代性に対比する形で保守的人間、田中宇左衛門が描かれることになる。

田中宇左衛門の応対は修理の心をなごませ、「主従の關係は、林右衛門のゐた時から見ると、遙に滑に」なる。宇左衛門は〈家〉よりも〈主〉を大事にした。林右衛門と宇左衛門の違いを本文は、「宇左衛門は、修理の発作が、夏が来ると共に、漸く怠り出したのを喜んだ。彼も万一修理が殿中で無礼を働きはしないかと云ふ事を、惧れない訳ではない。が、林右衛門は、それを「家」に関わる大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主」に関する大事として、惧れたのである。／勿論、「家」と云ふ事も、彼の念頭には上つてゐた。が、変があるにしても、それは単に、「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主」をして、「家」を亡さしむるが故に——「主」をして、不孝の名を負はしむるが故に、大事なのである」と描き分ける。

林右衛門は〈主〉よりも〈家〉を上位に置くことで、主を犠牲にしても余儀ないと考えた。それによって〈忠義〉という封建倫理からの解放を手にしたのであった。が、宇左衛門は「大事を未然に防ぐ」方途を持ち得なかつた。彼は「神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるやうに祈るより外は、なかつた」のである。

その年の八月一日、八朔の儀式に病後はじめて出仕した板倉修理は、一族の若年寄板倉佐渡守を訪ね、無礼の振舞いに及ぶその夜、宇左衛門は佐渡守によばれ、委細を知る。修理は林右

衛門の出兵に関して一族に相談しなかつたことを責められ、逆上し、刀の柄へ手をかけて、「手前家老の仕置は、不肖ながら手前一存で取計らひ申す。如何に当時出頭の若年寄でも、いらぬ世話はお置きなさい」と眼の色を変えての口上であつたという。その場で宇左衛門は、佐渡守から「今後は必とも、他出無用に致すやうに。別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい」と厳命される。封建制度の矛盾・軋轢を、語り手は宇左衛門の立場から以下のように述べる。

「主」の意に従へば、「家」が危い。「家」を立てようとするれば、「主」の意に悖る事になる。嘗は、林右衛門も、この苦境に陥つてゐた。が、彼には、「家」の為に「主」を捨てる勇氣がある。と云ふよりは、寧ろ、始からそれ程「主」を大事に思つてゐない。だから、彼は、容易く、「家」の為に「主」を犠牲にした。

しかし、自分には、それが出来ない。自分は、「家」の利害だけを計るには、余りに「主」に親しみすぎてゐる。

「家」の為に、唯、「家」と云ふ名の為めに、どうして、現在の「主」を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と変りがない。自分が絵解きをした絵本、自分が手をとつて習はせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶——さう云ふ物も、まぎまぎと、自分の記憶には残つてゐる。……

さうかと云つて、「主」をその儘にして置けば、独り「家」

が亡びるだけではない。「主」自身にも凶事が起りさうである。利害の打算から云へば、林右衛門のとつた策は、唯一の、さうして又、最も賢明なものに相違ない。自分も、それは認めてゐる。その癖、それが、自分には、どうしても実行する事が出来ないのである。

遠くで稲妻のする空の下を、修理の屋敷へ帰りながら、宇左衛門は悄然と腕を組んで、こんな事を何度となく胸の中で繰り返した。

宇左衛門はいま、矛盾の直中にいることを自覚させられる。語り手はこうした状況下、宇左衛門の人間性を明確にしようとするのである。矛盾の合理的解決には、《忠義》の否定きりない。宇左衛門にはそれが出来ない。林右衛門のとつた策を「最も賢明なもの」と認めながらも、それは宇左衛門には「どうしても実行する事が出来ない」手段であつたのだ。

二人の家の悩みは、それぞれ封建社会の中での典型的な悩みであつたのだ。二人の行動をあえて分別するならば、林右衛門には最終的に封建倫理の《忠義》という観念を投げ捨て、解放の叫びをあげて屋敷を立ち退く勇氣があつた。封建時代の倫理道德《忠義》を、ともかく否定する情熱が林右衛門にはあつた。それは近代人のとる態度である。他方、宇左衛門は人情の絆に縛られ、判断力を失つた修理の願いを安易に受け入れるという拳に出てしまうのである。

宇左衛門は情にもろい人物として設定される。《忠義》なるものは、人間関係を基本として成り立つ倫理でもある。宇左衛

門は「親のやうな心もち」で修理に接している。彼は封建社会のきびしい掟全体への目配りが甘く、修理の訴えにころりと参つてしまう。総出仕が迫つたある夜、宇左衛門は修理に呼ばれ、登城のことを切り出される。

修理は隠居する前に「今一度出仕して、西丸の大御所様（吉宗）へ、御目通りがしたい」、「それも、たつた一度ぢや」と言う。「恐れながら、その儀ばかりは」という宇左衛門に対し、修理は「世の嘲りはうける。家督は人の手に渡す。天道の光さへ、修理にはささぬかと思ふやうな身の上ぢや。その修理が、今生の望に唯一度、出仕したいと云ふ、それをこばむやうな宇左衛門ではあるまい」とか、「宇左衛門なら、この修理を、あはれとこそ思へ、憎いとは思はぬ筈ぢや」とまで言う。涙を流し、額を畳へつけようとしてまで懇願する修理の前に、感動した宇左衛門は、登城を許してしまう。

宇左衛門は人情に弱い、彼には《家》も大事だが、病んだ修理の人間の懇請も退け難かつたのである。それだからこそ「万一の場合には、宇左衛門歟腹を仕れば、すむ事でございます」ということになる。が、これは《主》を無批判に絶対化する愚直な措置であつたことは言うまでもない。語り手は宇左衛門の措置に、どうにもならない人間の弱さを認めているのである。が、感傷に埋没する人間の愚かさや盲従の怖さへの言及はない。悲劇はこの時点ですでに予見されていたのだ。

宇左衛門の返答を聞くと、「修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のやうな巧みさがあるが又、役者にないやうな自然さもある。——彼は、突然調子の

外れた笑ひ声を洩らした」とは、板倉佐渡への復讐の計画とそれを実行に移す機会の訪れを喜ぶ、すでに狂った修理を示すものであろう。原典『近代公実厳秘録』との違いを実証した須田千里は、二章後半のこの箇所をとりあげ、「原作は、修理の佐渡守への憎悪をあからさまに描き、出仕の目的も佐渡守殺害のためと明確に述べるが、芥川はそうせず、鶯の巢を盗む時鳥に佐渡守を擬えさせたり、「いや、いや、隠居の儀なら、林右衛門の成敗とは変つて、相談せずとも、一門中は同意の筈ぢや。」と佐渡守の陰謀を確信している修理の心理を彼自身の言葉の中から読みとらせたりする手法がとられている。この時鳥のエピソードは原作になく、芥川が独自に付け加えた部分だが、結末ともよく照応し、巧妙な配合と評されよう」と述べる。参考になる見解だ。

四 孤独と寂寥

「忠義」の「三 刃傷」は、延享四年八月十五日の朝、五つ時過ぎに起こった江戸殿中刃傷事件を語る。板倉修理は紋所が似ていた細川越中守を殺害し、発狂する。隠れていた所を発見された修理は、「血に染まつた手で、何度となく、鬢の毛をかきむしり、とまたまた髪の毛をかきむしる行為が、逆上の印として用いられている。修理は切腹、田中宇左衛門は縛り首の刑に処せられ、物語は終わる。そこには言いようのない孤独と寂寥が漂う。

一九一七（大正六）年三月七日の『時事新報』の匿名批評「舊

のふくらむ頃」は、「忠義」をとりあげ、「忠義」の題目は氏の思索や思想ではなく、一の史伝事実の心理的説明であつて、歴史小説と名付けて差支へのないものである。主人公の神経衰弱を忠臣が諫めると云ふ皮肉な境遇と、大名が真の人間の同情に渴して発狂してしまふ経路とが、氏一流の繊細な技巧で描かれて居る。殊に今迄の作品とは違つて氏が真正面に打突かつて行つて居る所が大に評者の心を得た」と評した。

また、『文章世界』一九一七（大正六）年四月号の道村春川評釈「前月文章史」は、「忠義」の冒頭の箇所を引いて、「板倉修理といふ、逆上して殿中で人を殺した殿様の、その逆上の初期の状態を描いたものである。ひどい神経衰弱にかゝつた人の感覚、神経が、如実に描かれてゐる。「細い蔓や葉が、どうも気になつて仕方がない」とか、「先の尖つた物を見ても、やはり不安になつて来る」とか、これは、神経衰弱にかゝつた経験のある人は、必ずおぼえがある可き事実だ。「蟻地獄に落ちた蟻のやうに」といふのも、全体的に、よくそのいら／＼とした心持を云ひ得てゐる、無理解な、無同情な周囲の中で、一人であら／＼としてさゝくれ立つた神経になやまされてゐる人の顔——青い顔をして、眉の根をひきづらせてゐる若い殿様の顔が、読んでゐる中に眼の前に浮んで来る」と評した。修理の神経衰弱の描写が精彩なのは、むしろ自身の現実、神経の高まりを転位させているからなのである。

これら肯定的な同時代評に対し、江口渙の「芥川君の作品」における「忠義」批評は、不思議と思われるほど低い。江口は初期芥川文学の最大の理解者である。「数多い新進作家の中で

芥川龍之介君位鮮かに頭角を露はした者はない」の一文ではじまる「芥川君の作品」は、芥川を強く支持したものであった。

が、本作に関しては、「羅生門」十四篇の中で「忠義」と「尾形了齋覚書」とが一番見劣りがする。「了齋覚書」は中心の掴み方が覚束ない上に全体がいちけてゐる。「忠義」は概念の具体化が足りない上に、板倉修理の狂乱が性格的であるか境遇的であるか必然であるか偶発であるかが不明なため、作者の倫理的批判の立脚地が稀薄に感ぜられる。作者はもつと修理の描写に力を入れて欲しかった」というものである。

鵬外の文体の影響が感じられる「尾形了齋覚書」にしても、当の「忠義」にしても、今日の批評眼からすると創作集『羅生門』の中では光る存在である。「一番見劣りがする」とは、とうてい言えない。けれども同時代評は、江口渙のものばかりか総じて低い。例えば家老二人のそれぞれの〈忠義〉は、「結局破滅と云ふ運命に向かつての歩み」とか、「どちらも同じやうなものだと云ふ思想が暗示されてゐるから、考へ方によつては虚無思想ともみられよう」といった具合だ。

研究者として「忠義」に最初に詳しく言及したのは、吉田精一である。その見解は「家」を主とし「人」を従とすべき封建時代に於て、「人」を主とし「家」を従としようとした一種のヒューマニズムが、却つて「家」の滅亡を招いたといふ解釈を附与したというものだ。が、その評価は低く、「鵬外の歴史小説には遠く及ばず」、「単なる物語に終わつてゐる」との見解である。一方、進藤純孝は「板倉修理の『発狂の予告のやうな不吉な不安』は、芥川の内面をそのままに語つてゐる」と言い、

「己は苦しんでゐる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」と思ふことが、すでに一倍、修理に苦痛であつたやうに、芥川もまた、ただ流行児扱ひするだけの周囲の無理解のために、一層苦しんだのに違ひない」とする。

勝倉壽一は吉田精一の論を受けて、「主」中心主義を貫いて破滅する宇左衛門のヒューマニズムへの作者のシニカルな眼と、修理発狂の描写の迫真性」から「作者の暗い人生認識と懷疑的精神」や「自己の存在基盤への原初的な不安の影」を読み取る、こうした作品評にあつて、作品の世界をより鮮明にするには、「どちらも同じやうなものだ」ではなく、二人の家老を対比し、その評価を鮮明にする必要がここに浮上するのである。

菊地弘は前島林右衛門に「型から出てゆくある種の自由な人間」を認め、そこに作者芥川の想いを讀もうとした。わたしもすでに述べてきたように、前島林右衛門に封建倫理との闘いを讀みとるので。

人間を否定する封建社会にあつて、林右衛門の「よいわ。この上は、林右衛門も意地づくちや。手を掛いて縛り首もうたれまい」の叫びに、時代や制度への反逆、——（自己解放の叫び）を認めるのである。もう一人の家老田中宇左衛門が（主従）のモラルからついに抜けでることができず、おめおめ縛り首の刑に服したのに比べると、林右衛門の生き方は決然としている。むしろその先には、留まることと同様の、否、それ以上の困難が予想される。が、林右衛門はあえて主君の、そして封建の制度からの脱出を試みたのである。その意図は、やはり壮とすべきもののなのである。

他者に理解して貰えない悲しみ、そこから来る孤独と寂寥は、若き芥川龍之介に常にまわりついていた。彼はその一端を主人公板倉修理に託した。一方で、さまざまな絆をふつきり、封建の規範を否定し、自己解放の叫びをあげて屋敷を立ち退く林右衛門への共感もまた、芥川の真実であった。芥川はここに革新と保守二人の家老を登場させ、林右衛門の《意地》と《論理》に熱い声援を送っているのである。

注1 関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、一九九九年三月二〇日

2 Rashōmon and Seventeen Other Stories PENGUIN BOOKS

二〇〇六年三月

3 ジェイ・ルービン・君野隆久訳「芥川は世界文学となりうるか?」『新潮』二〇〇五年四月一日

4 「忠義」草稿は、最新の『芥川龍之介全集』第二二巻に活字化されている。

5 吉田精一『芥川龍之介』三省堂、一九四二年二月二〇日、同筑摩書房版『芥川龍之介全集』第一巻「解説」、一九五八年二月二〇日

6 須田千里「芥川龍之介『忠義』論——『近代公実叢秘録』をめぐる——」『光華女子大学研究紀要』第27集、一九八九年二月一〇日

7 菊地弘「忠義」『信州白樺』第47・48号、一九八二年一日、のち『芥川龍之介——意識と方法——』収録、明治書院、一九八二年一〇月二五日

8 注6に同じ

9 江口渙「芥川君の作品」『東京日日新聞』一九一七年六月二八、二九、七月一日、のち、『新芸術と新人』収録、聚英閣、一九二〇年四月二〇日

10 田中純「芥川龍之介氏を論ず」『新潮』一九一九年一月一日

11 石坂養平「芥川龍之助論」『文章世界』一九一九年四月一日

12 注4に同じ

13 進藤純孝「伝記芥川龍之介」六興出版、一九七八年一月二七日

14 勝倉壽一「芥川龍之介の歴史小説」教育出版センター、一九八三年六月一〇日

15 注6に同じ

(せきぐち やすよし・都留文科大名誉教授、元文学部講師)